様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520150
研究課題名（和文）　萬葉集における訓字の訓詁学的研究

研究課題名（英文）　A exegetical study of the Japanese reading in Man-yoshu

研究代表者
内田　賢徳（UCHIDA MASANORI）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：90122142

研究成果の概要（和文）：萬葉集に使用される訓読みの漢字、訓字について、それぞれの漢字を当てることの理由を、中国でのその漢字の字義説明、訓詁に従って解明した。それによって、八世紀の日本において使用された漢字の訓字が、後の時代から想像されるより遥かに正確な知識に基づいていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：About the Japanese readings of Chinese characters, I have clarified the reasons how to use those Chinese characters to each Japanese reading, by exegetics. In view of these facts, the use of Japanese readings of Chinese characters in 7th and 8th centuries, was based on the correct knowledge more than the guess of after ages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：文学
科研費の分科・細目：国文学
キーワード：萬葉集、訓詁、訓字、古辞書、古代日本語

１．研究開始当初の背景

（１）萬葉集歌をどう訓むかというは、既に平安朝の十世紀半ば、萬葉集の往時から二百年後にはもう課題となった。日本語表記に平仮名が登場し、和歌は花、月など平易な訓字を交えて、ほとんどを平仮名で表記していた。その習慣が確立すると、前代の漢字のみを使って、自在な訓字と豊穣な萬葉仮名で表記された萬葉集の歌は、訓めなくなってしまっていた。十世紀半ば、源順ら、いわゆる「梨壺の五人」が詔を承けて着手した作業は、そのような萬葉集歌の個々がどのような歌であるかを示すことであった。萬葉集歌とは、即ち当時の古歌であり、それを解明して古歌の詠みぶりに倣うことというのが当代の歌についての要請であった。作業は今日の観点から見れば、極めて短期間に終わっている。それは、作業が細かな検討、即ち訓詁注釈を行うということではなかったからであろう。当時伝えられていた古歌が多く存在し、それ

は平仮名で書き留められてもいたであろう。それらと萬葉集歌の個々を突き合わせて歌を同定することというのが、その作業の実態であったと推測される。そこに成立したテキストを古点本と称しているが、現在伝わる萬葉集古写本に、古点そのままのものは存在しない。

（2）古点のあり方は、それ以後、十三世紀半ばまでに進められた萬葉集のテキスト校訂のあとと言える次点本から窺える。即ち平仮名別提訓と呼ばれる、萬葉集の漢字本文を記した次行に平仮名で歌の全体を示すというあり方である。この表示方法では、歌の全体がどういう歌かということが示されるのみで、どの文字がどういう訓みに対応するかということは、一義的には規定されない。

（3）そうした次点本諸本には、桂本、元暦本、類聚古集、紀州本（但し巻十までの部分）、平成になって公開された廣瀬本などが存するが、元暦本のように、他のテキストとの校合のあとをとどめるものもあり、それはこの時期に一方で著された顕昭『袖中抄』が訓みの検討を行っていることと見合っている。萬葉集の訓詁学の始まりと言ってよい。そこに見られるのが、萬葉集内の他の例との比較考量ということであったことは重要である。

（4）十三世紀半ば、鎌倉の僧仙覚の行ったテキスト校訂は、萬葉集研究史上最大の功績である。新点本と称される仙覚校訂テキストは、本文一字ずつの右に片仮名で付訓するという体裁で、本文の文字のそれぞれがどう訓まれるかという対応が見られている。訓みもまた精度を高めている。近世、寛永年間に版行された流布本は、仙覚本の一種である。仙覚の校訂方法はしかし、比較考量という立場を出ていない。

（5）その後の研究も、諸本の訓を比較検討し、取捨するという態度で行われてきた。いかし、元禄年間、十七世紀末に著された契沖『萬葉代匠記』は、萬葉集本文の用字が、多く中国の文献に出典をもつことを明らかにした。その後、岸本由豆流『萬葉集攷証』（文政年間、十九世紀前半）、木村正辞『萬葉集訓義辨證』（安政年間、十九世紀後半、刊行は明治 37 年）を経て、近代では、山田孝雄『萬葉集講義』（昭和 3～12）、澤瀉久孝『萬葉集注釈』（昭和 32～52）によって、萬葉集の訓詁学は進展したが、訓の根拠という点では、小島憲之『上代日本文学と中国文学上、中、下』（昭和 37～40）、「萬葉用字考証実例」（昭和 48～53）の示した方法が最も高い立場をもっている。

（6）即ち、それぞれの漢字が当時どういう用法をもっていると考えられていたかという立場から萬葉集歌を検討するということである。これこそが訓詁学の正道と言える方法である。今日それを継承することが肝要である。

２．研究の目的

上記の背景から、本研究は、萬葉集における訓字の個々について、正しい訓詁を見出して、読みを根拠づけていくことを目的とする。即ち、八世紀という時点にあって、日本において、漢字をどのようにして用いたかをあとづけ、当時に参照することのできた文献を特定しつつ解析することである。

３．研究の方法

（1）対象とする萬葉集のテキストは、「背景」に記したように、大きく二種に分かたれる。平安後期の次点本と鎌倉期の新点本である。従来これらを扱うための資料として、『校本萬葉集』が使用されてきた。しかし、同書は寛永版本という、萬葉集諸本中では雑駁と評してよい不確かなテキストを底本としているという欠点があった。また、諸本のデータを列挙するという形式であるために、校異の実際が見えにくく、何らかの別方法が求められてきている。本研究では新たに画像処理による諸本対照資料を作成し、各テキストの示差が一目にして分かるようにした。これによると、次点本と新点本の差は歴然としていて、紛れない。また、字体差も、細部に亙って明らかにできた。

（2）訓詁を行うためには、中国の字書が必須である。ことに、日本古代においてよく利用された梁顧野王篇『玉篇』は、日本にのみ残巻の伝わる字書であるが、その全体については、空海が作成した抄出本『篆隷萬象名義』から復元、析出することが可能である。それを主として利用して、漢字の訓義を明らかにする。また、後漢許慎篇『説文解字』、隋陸法言撰『切韻』を参照する。前者は、段玉裁注本を中心に用いる。後者は、逸文を集めた上田正篇『切韻逸文の研究』及び宋代篇の『広韻』を利用した。

（3）漢字に対して付される日本語、古代にあっては倭語を倭訓と称する。日本古辞書はその倭訓の集成であり、これを利用することで、個々の訓がどのような広がりをもつのかを明らかにすることができる。九世紀の昌住撰『新撰字鏡』は、一部に上代語の名残とも言うべき上代特殊仮名遣いの区別をもつ古辞書である。前回（平成 10～13）の科研費研究における『新撰字鏡』研究の成果をここに

生かすことができる。また、その方法を十二世紀の『類聚名義抄』の分析に生かして応用した。これらによって、萬葉集古写本の訓との関係を解明し、古写本の訓がどのような契機によって付けられているかを明らかにした。

４．研究成果

（１）巻二・一四九歌の第一句「人者縦」は、古写本のすべてでヒトハイサと訓まれていた。これをヒトハヨシと改めたのは契沖『萬葉代匠記』である。但し契沖はこの語を否定に関わる意味と考えていた。イナという語と同様と考えたのである。ここで取られているのは、類例から導くという方法である。この「縦」は、『玉篇』に「置也」とあって、引かれる『詩経』の例からすると、すておくの意である。副詞に使うとき、認容、放任の意であり、それが倭語のヨシと見合っている。旧訓ヒトハイサは、古今集の「人はいさ心も知らず」（紀貫之）に引かれた訓みであったと考えられる。萬葉集で用いるときに知られていた訓詁の忘れられた一例である。本研究の方法は、それを呼び返すことになる。また、巻十一・二四一〇歌の「年者竟杼」の古写本はトシハクルレドと訓む。ここでもこれをトシハハツレドと改めたのは契沖であった。しかし、それは類例から導かれていて、「竟、終也」（玉篇）という訓詁がたどられるのではない。そもそも萬葉では「暮る」とは一日が暮れるまで過ごすことであって、年については言えなかった。「歳の暮れ」のような言い方は、『白氏文集』に「歳暮満山雪」とある句を古今集に翻案してから日本語の表現になったのであって、歳は果てるものであった。この例からは、萬葉集の訓詁を正確に捉える本研究の方法が、延いては平安朝の表現を正確に捉えることにもつながることを示している。

（２）巻四・四八六歌の、「味村驂」とある箇所で、次点本は「アチムラコマハ」と訓んでいた。「驂」字は、「説文曰、驂、傍馬也」（文選李善注）という訓詁によって、三頭立ての馬車の馬、もしくは馬車の添え馬、つまり四頭立ての馬車の両脇の馬のことである。従って、次点本の訓は字義に適っていることになる。しかし、歌の趣意からは、アヂムラは鳥のアジガモ（味鴨）であらねばならない。これをアヂムラサワキ（上代はキと清音）と訓むようになったのは、『袖中抄』からである。萬葉集に「あぢ群」とあれば、サワクと続くのが多いという、用例分布に基づく解釈で、そこでは「驂」字の字義と訓詁は顧みられない。以後この訓みが踏襲されてきたが、訓みの根拠、訓詁については説かれてこなかった。小島憲之「萬葉用字考証実例三」（昭和 50）は、足偏の字などとの混同、そして「騷」字からの類推等によって、『玉篇』からこの訓みの成立する過程を推定している。しかし、「騷」字は萬葉集では一例も用いられず、また、平安初期の『新撰字鏡』にも「騷」にサワクの訓は見られない。そこで、古代日本語のサワクという動詞の意義を考え直すことが必要になる。サワクは、サヰと交替する語形で、サヰサヰは衣ずれの形容である。サワクとは、波の音や光が揺れている形状を形容するので、それがうるさいと言っているのではない。潮騷と書くシホサヰは、萬葉語で、海潮が揺れるように動き音を立てる様で、潮の音がうるさいのではない。「味村驂」は、アジガモがうるさいのではなく、群が波のように揺動する様を形容する。中国の『詩経』に載る鄭の国の民謡に、馬が舞うように疾駆する様を「驂」字で表現する例がある。「味村驂」（アヂムラサワキ）これに想を得た、意義を考えて訓字を付ける萬葉集の義訓の一種であろうと結論づけられる。ここで、萬葉集の訓詁を考証することが、古代日本語の単語の語義解釈を改めることにつながることが実証された。

（３）本研究の方法は、次のようにして、広く古代日本語についての提言を可能にする。吝嗇の「吝」の異体字「悋」をヤサシと訓んで、配慮のないという意義をヤサシに配当することを今昔物語集に溯らせるのが通説であり、国語辞書にもそのように記述されてきた。しかし、これは、日本霊異記の古本真福寺本の訓釈を安易に適応するもので、『新訳華厳経音義私記』にみえる「悋　ヤヒサシ」の訓を適用すべきところである。ヤヒサシは平安時代にはヤフサシとなり、しかし形容詞としては劣勢で失われてしまった。一方で、今日にも残るヤフサカナリが使われた。「……することに吝かではない」と慣用的に用いる語である。今昔の例は、ある判断についてそれに対する配慮を惜しんでいると評したものであって、安易であると置き換えることは短絡である。ヤサシについてのこの誤解は、ヤサシをハヅカシの意味に取ることにも及んでいて、この用法を萬葉集に溯らせること

が行われてきた。しかし、根拠とされる後漢書李賢注の「吝、恥也」の訓詁は吝であったことの失態を指摘している文脈的な説明の注であって、これをもってヤサシ即ちハヅカシの根拠とすることはよくない。古今集の例にあっても、ヤサシを原義の痩せる思いとして理解することがふさわしく、すでにハヅカシの意義になっていた時代の解釈を採用しない方がよい。ちなみに元来、ハヅカシは本来の面目を失うことに対して言われ、ヤサシは、ただ痩せる思いだと言う。現行の辞書の記述は、これによって改める必要がある。萬葉集の訓詁を正確にたどる方法は、古代日本語を明らかにすることでもあるということが、本研究の成果の更に及ぶ領域を示唆している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 内田賢徳、山部赤人の時空、叙説、奈良女子大学国文学会、査読有、37 巻、2009、pp. 1-9

② 内田賢徳、「吝」はヤサシとよめるか、国語語彙史研究、国語語彙史研究会、査読有、29 集、2009、pp. 119-132

③ 内田賢徳、「あぢむらこま」から「アヂムラワワキ」へ－4・四八六における訓釈をめぐって－、萬葉語文研究、萬葉語学文学研究会、第４集、2008, pp. 189-199

④ 内田賢徳、訓詁の忘却－仙覚テキストの批判と平安朝和歌－、萬葉語文研究、萬葉語学文学研究会、査読有、第３集、2007, pp1. 57-173

⑤ 内田賢徳、助詞ヲの本来－『あゆひ抄』「乎家」書入詳解－、京都語文、仏教大学国文学会、査読無、15 集、2007, pp. 20-32

〔学会発表〕（計１件）

内田賢徳、「目一つの鬼」攷、風土記学会、島根県立古代博物館、2009.9.13

〔図書〕（計１件）

内田賢徳（共著）、万葉集の今を考える、新典社、2009.7.5、pp.350

６．研究組織

(1)研究代表者

内田　賢徳（UCHIDA MASANORI）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：90122142